

Title	足尾鉍毒事件における潮田千勢子：キリスト教の問題を中心として
Sub Title	Chiseko Ushioda and her Christian faith in the Ashio mine pollution case
Author	工藤, 英一
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1982
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.75, No.3 (1982. 6) ,p.231(3)- 244(16)
JaLC DOI	10.14991/001.19820601-0003
Abstract	
Notes	島崎隆夫教授退任記念特集号
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19820601-0003">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19820601-0003</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 足尾鉍毒事件における潮田千勢子

—キリスト教の問題を中心として—

工 藤 英 一

- I 序
- II 千勢子のキリスト教受容
- III 社会的活動
- IV 足尾鉍毒問題への関心
- V 鉍毒地救済婦人会
- VI 救援活動
- VII 結 び

## I 序

足尾銅山鉍毒事件（略して足尾鉍毒事件）は、約30年の長きにわたった公害事件である。<sup>(1)</sup>被害地域の広域なことと、公害源が産銅量日本一の銅山であったことから、鉍毒反対運動をめぐる事件の経過は社会問題化しかつ政治問題化した。それゆえ事件関係者は、現地において激的な運動を組織化した者だけにとどまらず、多くの都市知識人層に及んだ。しかもそれらの知識人層のなかには、特定イデオロギーの者だけでなく、実にさまざまな政治的・思想的・宗教的立場の者がいた。

これらの都市知識人層において、キリスト教徒特にプロテスタントが大きな比重を占めたことは、<sup>(2)</sup>ひとつの注目すべき点である。その歴史的要因が何であるかについては、行論のうちにその一端に触れることになる。

鉍毒事件に関心を寄せたキリスト者婦人といえ、まず第一に注目すべきは、日本基督教婦人矯風会の幹部であろう。そのうち最も注目すべきは、婦人矯風会を母体として生まれた鉍毒地救済婦人会の会長を務めた潮田千勢子にはかならない。

潮田千勢子（以下千勢子とする）と鉍毒事件との関係を論じた研究論文としては、阿部玲子「足尾

注(1) この場合、いわゆる谷中村事件を含めて足尾鉍毒事件と考える。

(2) 拙稿「足尾鉍毒事件とキリスト教徒」（『社会運動とキリスト教<改訂増補版>』〔日本YM出版・1879年8月〕所収）。

### 足尾鉍毒事件における潮田千勢子

鉍毒問題と潮田千勢子<sup>(3)</sup>がある。同稿は「従来余り重要視されなかった鉍毒地救済婦人会と潮田千勢子の側面から鉍毒問題をみていきたい」とするものである。鉍毒地救済婦人会は、1886（明治19）年東京婦人矯風会として発足し、1893（同26）年全国組織となった日本基督教婦人矯風会によって形成されたものである。

従って、千勢子の鉍毒問題への接近を考える場合、千勢子をしてこのような婦人運動に向わしめたものが何か、ひとつの研究課題となろう。特にその点を、千勢子がたどった生活体験の中に占める宗教的信仰—具体的にはキリスト教—の意義を探り求めていくまで明らかにすることは、千勢子と鉍毒事件とのかかわりを考察するに当たっての根源的な問題となる。

千勢子がみずから先頭に立った鉍毒地救済婦人会結成の経過やその活動については、前掲・阿部稿も触れているところであり、松本英子編『鉍毒地被害の惨状』第1篇（教文館、1902年4月）はその基本的文献である。従って本稿では、救済婦人会の具体的活動については、その叙述を最少限にとどめ、専らそこにおけるキリスト教に関連した問題に焦点をあわせたい。

以上のような視点から千勢子の鉍毒事件とのかかわりを考察し、千勢子の活動が事件全体のなかでいかなる意義をもつかを明らかにしようとするのが、本稿のめざすところである。千勢子の経歴の詳細については、前掲・阿部稿をはじめ、阿部玲子「潮田千勢子」（『近代日本の女性史』8巻、集英社、1981年5月 所収）、さらにもろさわようこ「潮田千勢子」（『信濃のおんな（上）』未来社、1969年5月 所収）を参照されたい。

## II 千勢子のキリスト教受容

千勢子の入信は、1882（明治15）年である。葬儀の席で朗読された「潮田千勢子略歴」には、「明治15年宣教師ソーバルより洗礼を領し<sup>(4)</sup>」とある。

入信当時の千勢子は38歳（数え年）、結婚後18年を経た、旧飯田藩士潮田健次郎の妻であった。潮田家は藩の重臣であったとはいえ、旧禄高100石、秩禄処分以後の生活は貧しいものであった<sup>(5)</sup>。

阿部・前掲両稿には、飯田江戸町の千勢子の生家が空家となったため教会に使用され、千勢子は「実家の宣教師の姿や讃美歌の声に、封建時代の終りを読みとったのであろう」と述べられている。このことが千勢子入信の契機のすべてであったとはいえないが、キリスト教に親近感を抱くひとつ

注(3) 歴史科学協議会編『歴史評論』347号（1979年3月）所収。

(4) 村沢武夫著『郷土のキリスト教』（飯田郷土史刊行会・1961年7月）は、千勢子への授洗者をM・C・ハリスとしている。ここでは『婦人新報』75号（明治36年7月22日）所収の「略歴」によりソーバル説をとった。これは、病床の千勢子の談話を白井俊一が筆記したものである。

(5) 「故潮田千勢子刀自伝」（『婦人新報』76号・明治36年8月25日、所収）には、当時の「家計困難」についての千勢子の直話が載っている。

の理由とはなつたであろう。飯田のような地方の城下町では、当時のおキリスト教への偏見・反感は根強いものがあつたからである。<sup>(6)</sup>

米国美以教会による布教が飯田に定着したのは、1879(明治12)年であつた。それは松本美以教会から始められ、1880年7月から伝道師1名が飯田に定住した。<sup>(7)</sup>同年10月の景況につき、『七一雑報』は次のように報じている。<sup>(8)</sup>

「○信州飯田教会近報

10月下旬東京ハルリス氏巡廻飯田会堂に於て講義聴衆数百人に及び受洗する者男1人女1人当会は会友未だ10名に充たざるも各々奮発して教会維持金毎月3円80銭を出し日旺日慈愛の爲出金概して1ヶ月1円を下らず数年ならずして独立の教会を立てんと尽力し又一の禅僧有て河邨氏を助け信徒を励ます故に一層道の爲に感動する者ありと該地より報知。」

千勢子の入信が飯田においてだとすれば、それは上に述べた美以教会の活発な布教活動のなかにおけるものであつた。『七一雑報』の記事によって、さらに飯田伝道の景況を考察した場合、千勢子によるキリスト教受容の特質を窺わしめる幾つかの問題に当面する。

同地でいち早く入信した婦人信徒たちは、同性の信徒の教導や有志婦人への布教に活発な活動を展開し、製糸女工への布教に及んだ。すなわち「河邨須磨子ハ会友井伊浜子堀勇子遠藤栄子等ト共ニ信徒ノ婦人宅ヲ廻リテ祈リヲ勸メ讚美歌ヲ教ヘ来月三日ノ会席ヨリ長谷川氏ノ工女ニ之レヲ教導セン事ヲ謀リ又諸処遠路ヲ厭ハズ婦女有志ハ力ヲ尽シテ女子ヲ導ク事ニナリシト云」<sup>(9)</sup>とある。ここには、キリスト教信仰をつうじて新しい人間観にめざめ、そのことを神の恩寵として受けとめ、恩寵への感謝として、隣人に信仰を伝えずにはいられない信徒の姿が認められる。とりわけ、それまで封建的隷属を強いられてきた婦人においては、人間的覚醒と解放の自覚はいっそう強いものがあつた。千勢子のキリスト教受容は、何よりも人間解放の福音としてキリストの教えを受け入れることであつた。

しかしこの解放の福音は、ただ単に人間性の解放として受けとられたのではなく、むしろ古い社会に支配的であつた伝統主義的な価値判断や行動様式からの自由として受けとめられた。その場合、日本社会にキリスト教をもたらした宣教師、とりわけ米国人宣教師のピューリタニズムの影響が重要な意味をもつた。しかも、飯田におけるキリスト教の主流をなしたメソジスト教会の信仰は、その創始者ジョン・ウェスレー以来の特色として、キリストの救いと聖霊の感化を、信徒ひとりひと

注(6) 『七一雑報』5~7(明治13年2月12日)の「横浜会事近報」は、メソジスト・エピスコパル(美以)教会より信州松本へ派遣された伝道者・川村敬一郎の飯田伝道を報じ「該所は頑固の人多き地なれば従つて防禦の法にも種々手を尽す由」と伝道の困難を伝えている。後年のことであるが、『護教』498号(明治34年2月9日)には、「当飯田地方の各寺院互に申合せ他宗教の式の葬式は門内に入れざるの規約にして曩には随分面倒なりし(後略)」と記している。

(7) 松本美以教会の歴史については、『松本教会百年史』(日本キリスト教団松本教会・1978年9月)がある。

(8) 5~47(明治13年11月19日)。

(9) 前同誌, 5~52(同13年12月24日)。

### 足尾鉍毒事件における潮田千勢子

りの魂の回心や再生という体験のなかで受けとめようとする敬虔主義的なものであった。従ってここでは、神の義認に対して、聖化ということが強調される。すなわち、罪にうちかって聖潔を実生活の中に実現していくことが、信仰生活の本義として重視される。このことから、メソジスト教会では聖潔な生活の具体的課題として、禁酒禁煙や矯風運動などが特にとりあげられる。この点は飯田における美以教会においても例外ではなかった。

ただし聖化の生活は、禁酒禁煙や矯風運動だけではない。貧しい者や病める者への愛のわざの実践もまた重んじられる。それはまた聖書の教える隣人愛の実践としても重視された。飯田の信徒たちがこのような実践に強い熱意を示した状況の一端は、『七一雑報』の記事のなかに発見できる。しかも、信徒の実践が地域の人びとの共鳴を呼んだ点は、いっそう注目に値いする。おそらく千勢子もまた、信徒たちの実践によって魂の奥底を揺り動かされた者のひとりであったろう。「信陽飯田教会近報」と題する記事の一部を以下に引用する。<sup>(10)</sup>

「過る一月以来飯田信徒は行倒れの病婦の為に衣服薬食薪炭の心尽しより更に介抱人までを雇い信者替る替る見舞て最も隣を愛する己の如くせり然のみならず憐むべき貧病者親子5人を助たり此愛心の切なるに感ずる人ありて不信者も鼓動して米銭を恵むに至れり殊更木下吉沢の兩氏は安息日毎に市中裏店住居の極窮困の人を自ら問尋ねて米銭を施し怠れる者に勉勵すべきの条理と生活の方法を諭し善に赴くの事を勧め(後略)」

### Ⅲ 社会的活動

千勢子受洗の翌年6月、夫健次郎は突然不帰の客となった。遺された3男2女のうち、長男伝五郎は15歳、末女えみ子は5歳であった。千勢子はこの逆境を、果敢な挙家上京の決断をもって切り抜けようとした。1884(明治17)年まず長男を、続いて次男功を上京遊学させ、さらに千勢子自身も1男2女を連れて飯田を去って上京した。その際の心境を千勢子はみずから「私は若し信者でなかったなれば、到底斯様な考へは起らないであつたでせうが、幸にも神の御守護は慥かにわが上にあると云ふことを信じて居りましたから、斯様な決心も出来たので御座ります」と語ったという。<sup>(11)</sup>

この上京は、千勢子の生涯における大きな社会的転換であった。しかもすでに40歳であった。血縁につながる家族・親族の援助にすぎることなく、女性としての自活の道を開拓しながら、一家の生活を支えていく東京での生活が開始された。千勢子はまず桜井女学校付属幼稚園保母科に入学し

注(10) 前同誌、6~24(同14年6月17日)。なおこの記事は、4月28日夜から宣教師ハリス夫妻の連続演説会が開催され、男女各2名の受洗者があったと報じている。特に5月3日夜は婦人のみの集会であったという。

(11) 「故潮田千勢子刀自(上)」(『婦人新報』75号・明治36年7月25日、所収)。もろさわようこは、飯田・長久寺にある健次郎の墓石に法名のないところから、健次郎も受洗していたのではないかと推論している。(『信濃のおんな(上)』283ページ)。

(12) た。保姆という職業は単なる生業としてばかりでなく、幼児教育をつうじて社会に貢献しうるものであった。桜井女学校校長矢島楯子との出会いもまた、千勢子のその後の社会的活動にとって大きな意味をもった。

1887(明治20)年、千勢子は横浜聖經女学校に入学した。同校は、1884年9月に発足した米国美以教会の女子神学校である。1890年7月同校卒業、その後7年間婦人伝道師として働いた。しかし、神学生となる以前から、千勢子は婦人矯風運動の中に身をおいていた。すなわち1886年12月6日の東京婦人矯風会の発足に際し、発起人22名のひとりとして千勢子はその名をつらねている。

この会は、その「主意書」に(1)夫婦間の清潔な交際の確立、(2)家族制度の中での婦人の地位の低さからの解放、(3)芸娼妓の廃止、(4)女子教育の振興、(5)女子職業の発展、(6)婦人を差別する法律の改正等を掲げているように、近代的市民的婦人観に立つ女権拡張をめざす運動体である。<sup>(13)</sup>従って、必ずしもキリスト教を標榜するものではなかったが、国際的キリスト教婦人矯風運動の支援を受け、しかも会員特に指導者にキリスト教徒が多かったので、この会は、自他ともにキリスト教団体とみなされていた。

千勢子はキリスト教徒として、きわめてスムーズにこのような社会実践に身を挺していった。1889(明治22)年には、佐々城豊寿・巖本嘉志らとともに、矯風会中の有志団体である白標倶楽部を組織した。社会的問題に対する矯風主義の実行を要求するようなラディカルな政治的運動は、この倶楽部の名を以ておこなわれた。このようにして千勢子は、矯風会幹部のひとりとなった。全国組織としての日本基督教婦人矯風会の会頭は、創立以来約10年間、矢島楯子が務めたが、千勢子は副会頭として矢島の片腕として働き、1903(明治36)年4月には会頭に選ばれた。

千勢子の社会的活動の大部分は、矯風会をつうじてのものであったが、そのうち、千勢子個人の体験と思想から特に強く打ち出されたのが授産所の設立であった。千勢子にとって、経済的自立は婦人の自立のための要件である。それは、千勢子自身の体験から得た確信でもあった。特に娼娼運動に従事するなかで、授産が婦人の経済的自立のみならず、多年の弊習である婦人の依頼心を排除して精神的独立をもたらすものと考えられた。すなわち千勢子は、1888(明治21)年、宣教師スペンサーと飯田町5丁目に修身職業英和女学校を開校した。また1890年、青木周蔵の支援を得て、麻布市兵衛町に女子授産場を設け、貧しい者への授産と教育を始めた。そこでは、授産教育とともに、聖書に基づいたキリスト教教育と伝道がおこなわれた。これと並んで、1894(明治27)年大久保に

注(12) 1876(明治9)年創立の桜井女学校(設立者・桜井ちか子)は、1880年米国長老教会の所管に移り、中六番町28番地に新校舎を建築、矢島楯子を校長に迎えた。1883年既にあった幼稚園の拡張のため、三番町52番地に分校を開き、米国からミス・ミリケンを招いた(田村直臣編『女子学院50年史』同学院同窓会・1928年10月、15~16ページ参照)。

(13) 「東京婦人矯風会主意書」の全文は『女学雑誌』18号(明治20年8月6日)にある。ここでの要約は、千野陽一著『近代日本婦人教育史』(ドメス出版・1979年5月)59ページ参照。

#### 足尾鉍毒事件における潮田千勢子

矯風会経営の授産所を設立し、慈愛館と名づけた。<sup>(14)</sup>そこでは、いわゆる「転落婦人」の救済と職業婦人の宿舎が営まれた。

#### Ⅳ 足尾鉍毒問題への関心

千勢子が足尾鉍毒問題と出会った時期については、幾つかの所説がある。そのひとつは、木下尚江の斡旋により啓発されたとするもので、その時期は1901（明治34）年11月とされている。<sup>(15)</sup>

このいわば定説とされているものに対し、阿部・前掲稿では、千勢子の手記「渡良瀬の民」の一節を引用して、田中正造から鉍毒調査有志会の委員となることを委嘱された事実を指摘し、有志会の結成が1900（同33）年7月21日であることから、木下の呼びかけ以前における千勢子と鉍毒問題との出会いが主張されている。

『婦人新報』48号（明治34年4月25日）掲載の記事に、「矯風会員其他に対する希望（4月2日青年会館にて）田中正造氏演説」と題するものがある。これは、田中が矯風会に招かれておこなった演説の概要を記したものである。この記事によると田中は、「去る30年の春のことであります。只今の会頭矢島女史よりして、此の会に出席いたします様にと申されたことがあります。併しその当時は鉍毒事件の為め、参ることが出来ませんでした」と語ったとされている。このことから明らかのように、1897年頃から矯風会幹部と田中との間に何らかの交渉があり、従って矯風会幹部の間に鉍毒問題についてのある程度の認識があったに違いないと考えられる。田中と矯風会との間をつなぐ人物としては、島田三郎があげられる。キリスト者政治家である島田は、妻信子が矯風会員であった、矯風運動の理解者であっただけでなく、田中と同一政党（進歩党・憲政党・憲政本党）に属し、党内における鉍毒問題の最も良き理解者であった。<sup>(16)</sup>

上述の1901（明治34）年4月2日の演説会で、千勢子は親しく田中と接し、鉍毒問題への関心をもち、これを機縁として田中から鉍毒調査有志会委員の委嘱が千勢子になされた<sup>(17)</sup>とみることができよう。

千勢子が鉍毒問題への関心をいっそう深め、それに積極的に取り組むに至るには、1901年内にい

注（14）修身職業英和女学校については、阿部「潮田千勢子」参照。慈愛館については、潮田千勢子「慈愛館のことに就て」（『婦人新報』18号・明治31年10月20日、所収）及び「拜啓（慈愛館について）」（『婦女新聞』18号・同34年4月8日、所収）参照。なお『銀座教会90年史』（日本基督教団銀座教会・1981年2月）には、「東京大久保に女子救済所を設け、潮田千勢子はこれを念春館と命名した」とある（69ページ）。この名称については、疑問としておく。

（15）例えば、永島与八著『鉍毒事件の真相と田中正造翁』（明治文献版・1971年4月）507ページ参照。

（16）『日本基督教婦人矯風会年表』（同会・1976年12月）によれば、1895（明治28）年の項に「足尾銅山鉍毒事件につき救護班を出し、また現地女子を慈愛館に保護」とある。同様の記述が公害関係年表や婦人運動史年表にも見いだされる。いまここでは、この記述の真偽は疑問としておく。

（17）田中正造日記「明治34年4月16日」の項に「潮田千勢子 芝金杉新浜町1」とある。（『田中正造全集』10巻、岩波書店・1978年7月、266ページ）。

まひとつの体験を経るのであるが、その前に当時の鉍毒事件の状況を一瞥しておきたい。その場合まず注目すべきは、1900（明治33）年2月13日の川俣事件である。1万人を動員した第4回大挙上京請願の行動は、官憲の阻止・弾圧にあつて、この事件となった。この大挙請願そのものが、累積した鉍毒被害のため危機に瀕した被害民の生活上の苦境を物語るものであったが、事件によって大量の逮捕者を出し、とりわけ現地の鉍毒反対運動指導者の殆んどが告発・起訴された。このことは、現地の運動にとって大きな衝撃であり、その「組織的退潮」をもたらした。もちろん、事件を契機として公判闘争の形で運動は継続されたが、その過程で「離間者」の出たことも事実であった。田中正造も、このような運動の退潮過程に即して、その活性化をはかるべく、新戦略の造出に苦心せざるをえなかった。田中の脱党・議員辞任・直訴という一連の行動は、このような状況との関連において理解しうる。<sup>(18)</sup>

川俣事件以降の反対運動にとっての戦略的課題のひとつは、鉍毒事件への世論の喚起であった。そのためにとられたのが、都市知識人へのアピールであった。鉍毒調査有志会の組織化は、まさにその主要な一環をなした。そこに結集された人物については、1900（明治33）年7月11日および22日の田中正造日記により知りうるが、特にキリスト教徒の占める比重の大きさが顕著である。<sup>(19)</sup>このことから、やがて婦人矯風会幹部への勧誘となったものと考えられる。

## V 鉍毒地救済婦人会

千勢子が、その会長として鉍毒問題に深くかかわりをもつことになる鉍毒地救済婦人会結成の経過については、千勢子自身次のように記している。

「去明治34年11月3日毎日新聞社の鉍毒演説会を傍聴して一度視察せざるべからずと思ひ立てる折柄島田三郎氏より被害地巡回の実況を語られ其惨状を実視せばやと有志婦人数名を誘引して11月16日初めて被害激甚地海老瀬に赴き或は病者に或は狂者に其他死に頻せる者の多きに驚き帰京の上各被害民救助の焦眉の急なるを感じ有志の兄姉に謀りて同月29日神田青年会館に於て救済演説会を開き鉍毒地救済婦人会の設立を発表せしに直に百有余円の義捐金を得（以下略）」<sup>(20)</sup>  
（「鉍毒地救済婦人会の来歴」）

11月16日の矯風会幹部による現地視察の参加者は、会頭矢島楯子・副会頭潮田千勢子・島田信子・松本英子であり、一行を田中正造が案内した。矢島と島田は日帰りで帰京したが、千勢子と松本

注（18）東海林吉郎「足尾銅山鉍毒事件における直訴の位相」（渡良瀬川研究会編『田中正造と足尾鉍毒事件研究』1号、伝統と現代社・1978年7月）参照。

（19）前掲・田中全集・10巻、201・205ページ参照。キリスト教徒として、以下の人名が見いだされる。島田三郎、巖本善治、安部磯雄、小崎弘道、留岡幸助、蔵原惟郭、丹羽清次郎、江原素六、西原清東、松村介石。

（20）松本英子編『鉍毒地の惨状』第1編、付録。



### 足尾鉍毒事件における潮田千勢子

は海老瀬村の松本英一宅に二泊した。11月29日の演説会は、『毎日新聞』12月1日号によれば、矢島が司会し、最初に千勢子が登壇した。この演説は、千勢子の鉍毒救済に関する第一声にはかならなかった。

その後12月6日午後5時から、日本橋教会で鉍毒救済婦人会の発起人会が開かれた。出席者は、矢島・千勢子のほか、島田信子・朽木よし子・木下操子・三輪田真佐子（令息が代理）・松本英子であった。この席において千勢子が会長に選ばれた。発起人会終了後の6時半より、日本橋教会青年会の発起による鉍毒演説会が、同教会牧師松永文雄の司会で開催された。ここでも千勢子は最初に登壇し、被害地から上京した病人および子供らの現況を語り、かれらへの同情を訴えた。つづいて木下尚江・田村直臣・島田三郎が演説したが、田村の演説に感激して10円の献金を申し出る者があった。なお、ライオン歯磨店主小林富次郎は、当日の会の趣旨に賛同して、毎日新聞に50円を送った。<sup>(21)</sup>

このような演説会は、救済婦人会が当面力を注いだ活動であった。連日のように演説会が主催され、時には他団体主催のものを支援した。特に救済婦人会の演説会では、木下や田村の情動的雄弁によって、しばしば感動的な場面が見られた。例えば12月11日夜の数寄屋橋教会では、その前日田中正造の直訴未遂事件があったこともあって、木下はとりわけ熱弁をふるい、木下の老母が救済婦人会に衣類を寄付したことを述べてみずから涙を流し、聴衆を感動させた。12月20日の本郷中央会堂では、河上肇が外套・羽織・襟巻を脱いで即座に寄付し、翌日には毎日新聞社に匿名で12点の衣類を届ける事件があった。

救済婦人会の活動との関連で注目すべきものに、12月27日の都下の学生による鉍毒地視察修学旅行があった。直接にこのキャンペーンを担当したのは毎日新聞であり、実際の指導に当たったのは、委員長<sup>(22)</sup>の田村直臣や監督委員の安部磯雄であったが、救済婦人会の演説会が学生の関心をひき立てるのに役立ったことは否定できない。この修学旅行の参加者は、毎日新聞の報道では800といわれ、警察側からみても520と推定され、30日の報告演説会や翌年1月以降の路傍演説によって、東京市民に鉍毒問題を強く訴えた。特に、鉍毒救済学生会は、修学旅行に参加した各学校の学生に東京市内の各地区を分担させ、市民への啓蒙と救済資金のカンパを効果的におこなった。これが学生の路傍演説である。

千勢子が救済婦人会の会長として、専ら救済活動に力を注いだとはいえ、鉍毒問題の根本的解決をめざすことを決して忘れてはいなかった。その点は、以下にあげる千勢子の行動に認められる。

その第一は、足尾銅山主・古河市兵衛に対する鉍業停止の要請文の交付である。この「与古河市兵衛書」の全文は『毎日新聞』の1902（明治35）年1月12日号に公開されたが、市兵衛はこれに何ら

注 (21) 『毎日新聞』明治34年12月8日号。

(22) 拙稿「鉍毒事件＝関スル学生路傍演説一件」（『田中正造と足尾鉍毒事件研究』3号・1980年8月、所収）参照。

答えなかった。さらに千勢子は、鉍毒救済活動への国会の積極的取り組みを願って、1902年1月貴衆両院議員に檄文を配付した。その内容は決して過激なものではなく、社会の贖罪行為としての救済活動を強調したものであったが、千勢子とこの檄文の執筆を担当した松本英子は、京橋警察署に召喚された。<sup>(23)</sup>

## Ⅵ 救 援 活 動

救済婦人会がおこなった事業は、ほぼ次の4項目に分けることができる。すなわち(1)演説会の開催、(2)金品の寄贈・援助、(3)被害地少女・婦人の教育、(4)被害地病人の入院施療である。

演説会は、組織結成当初から東京において頻繁に開催され、大きな反響を呼んだことはすでに述べた。1902年にはいるや、1月19日の横浜を最初として、東京以外の各地でも演説会が開かれた。関西方面からの督促を受けて、千勢子は木下・田村とともに、2月5日夜新橋を立て関西遊説の旅に出た。6日夜大津、7日夜京都、8日午後京都、10日夜神戸、11日午後大阪・夜京都、12日午前京都府高等女学校・午後彦根、さらに名古屋と、千勢子の旅程はきびしいものであった。いずれの演説会でも、数百の聴衆があり、木下や田村の演説に感動した者は、多額の義捐金を献げ、身に着けた衣類を寄付した。

京都府高等女学校(後の京都府立第一高女)における千勢子の演説は、洛陽教会での前日の演説に感動した同校生徒志知文子が、校長の許可をえ、宿舍に千勢子を訪ねて懇請した結果、突然に開催されるに至ったものである。その演説内容の筆記が、同校校友会機関誌『鳴沂会雑誌』15号(明治35年12月18日)に掲載されている。<sup>(24)</sup>それによれば、千勢子の演説は、木下や田村のとは違って、諄諄と聴衆に語りかけ、説得的に鉍毒問題への理解と同情を訴えるものであった。<sup>(25)</sup>

救済婦人会の演説会が、キリスト教会やキリスト教関係施設を会場としたのは、この会が基督教婦人矯風会を母体として生まれただけに当然であった。しかし、救済婦人会はキリスト教徒によるボランティアな運動体であり、特定の教派・教団に組織的につながるものではない。従って、演説会の開催も、会場となる教会の内部に救済婦人会の運動に協力する者が存在していなければ実施は困難であった。先にあげた京都洛陽教会の場合には、同教会の信徒松岡悟(荒村)がいた。大阪での

注(23) 『毎日新聞』明治35年1月17日号及び2月7日号。

(24) この「瀬田千勢子君の演説」は、天野茂著『松岡荒村』(ベリカン書房・1961年4月)にその全文が付録として収録されている。

(25) 千勢子の演説については、高橋誠一郎「吉村萬治郎君と瀬田江次君」(同著『回想90年』筑摩書房・1973年6月、所収)に、「女史の演説は社会改革家的な熱烈もなく、また正義人道を説く牧師的な教誨もなく、ただ静かな声で淡々として鉍毒被害地の視察談を進めておられたのであるが、そのうちに、ある被害民の家を訪れると、『焜炉にお鍋がかかっています、他の家とくらべて、いくらか裕福なように思われましたので、蓋をとって見ますと……』といいさして、顔をおおって泣いてしまったのである。ややあって涙声で申される。『何を煮ているのかと思うと、水の上に雑草の葉が二ひら三ひら浮いているだけなのです』と言って、また泣きおとす。(後略)」とある。(147ページ)。

演説会の場合、千勢子の一行が西下した時点ではいまだ準備がなされておらず、京都から松岡が駆けつけて準備に当たったことにより、ようやく実施可能となった<sup>(26)</sup>という。

情宣活動等において、各教派の教会組織が利用されることはあったとしても、救済婦人会の運動が全面的に当時のキリスト教徒の間で絶対的な支持をえていたわけではない。プロテスタント教徒のなかには、鉍毒反対運動に批判的な動きも存在した。その一例として、基督教同志会有志者による「足尾銅山鉍毒視察の実相」と題する『護教』（552号、明治35年2月22日）への投書記事がある。その要旨は、鉍毒反対運動は鉍毒被害の状況を極端に誇張するものであり、被害があるとしても、その額は足尾銅山が国家にもたらす巨額の利益に比較すればとるに足らず、反対運動の主張する鉍業停止は実現不可能の議論だとするものである。そして最後に、(1)古河市兵衛はすでに被害民に30万円以上を支出している、(2)被害地の田地は荒廃しておらず、同地方産の米穀は多少減少したが、なお他地方に移出されている、(3)洪水被害は、他の河川にも見られることで、渡良瀬川個有の問題ではない、(4)除害工事の結果、脱硫酸に注入する石灰乳は亜硫酸石灰液となり「大気に暴露し農業に有益なる肥料硫酸石灰に変化し流出し居る」、の4点を特に強調した。

『護教』はその翌号（同年3月1日）で、この投書を掲載したことの「不明と不注意」を反省し謝罪している。おそらく強い抗議が寄せられたためであろう。その頃千勢子は、銀座美以教会のメンバーであり、『護教』はいうまでもなくメソジスト教会系の機関誌である。

救済婦人会の演説会が、鉍毒問題に関する一般市民の啓発とりわけ婦人層・学生層のそれに資するところ大であったことはいうまでもない。それと同時に、席上における金品の寄付は、救済活動に資する点さらに大きかった。醸出された金品は、被害地に届けられたことはもちろんだが、千勢子は頻繁に、被害地を訪れ、被害民を各戸毎に訪問し、かれらを慰問して深い同情をもって救護物資を分配した。その場合、千勢子は被害民への精神的影響を配慮するのみならず、救護物資を贈る者の自戒についても深い配慮を払った。千勢子は演説のなかで次のように語っている<sup>(27)</sup>。

「身には襦袢を着ておっても心は質朴であります。人から物を貰うなど卑しい心は少しもありません。私が物を与えましても勿体ないというて辞退をいたします。田舎の家は生垣があって6尺くらいの高さであります、私等が通りますと皆その傍に土下坐しております。私は困りますからして、さようなことはしてくれると申しましたが聞入れませぬ。かかることをしておりますのは、物を貰いたいためにしようとしておるのかと尋ねますと、これは物を恵まれたその御礼にかようにしておるのでありますと申しました。(中略)それについて注意していただきたいのは、この美風をいつまでも存するように、品物を一寸土産のようにしてやって下さって、直接に理なしに金銭を与えないように、乞食根性を起させないようにしていただきたいのであ

注(26) 木下尚江「余は如何にして君を知りたる乎」（『荒村遺稿』明治文献版・1963年5月、所収）。

(27) 「潮田千勢子の演説」天野・前掲書、362・364ページ。

ります。」

千勢子が最初に鉱毒地を訪れて、最も強く感じた問題のひとつに、被害民の子女の教育のことがあった。かの女たちは、窮迫した生活のために登校もできず、長期欠席を続けていた。かの女らの将来を考えた時、千勢子は廃娼運動での経験をとおして、かの女らに自活の道を備えてやる教育の必要を痛感した。そのため、かの女らを東京の慈愛館に引きとることが考えられた。その後半月を経て、1901年12月1日、海老瀬村山口の平石もんほか11名が松本留吉の引率で上京、慈愛館にはいった。その後数名が加わって、翌年1月末には16名に達した。しかし、同年3月までの間に親たち<sup>(28)</sup>の引取りによって殆んど娘は現地に戻ってしまった。

このように鉱毒地の少女の慈愛館での教育は成功を取めたとはいいいがたい。年少の娘を親もとかから引きはなし、東京に連れ去ることに大きな困難があった点は否定できない。さらに矯風会の背後にあるキリスト教に対して住民が抱いた疑心暗鬼の念もまた、その一因をなしたといえよう。ともあれ、千勢子の鉱毒地への救援活動が、単に窮民にパンを施すことだけでなく、被害民の教育の問題として考えられた点まさに達見というべきである。

千勢子が鉱毒地の婦人のために自活の道を備えようとしたのが、谷中村に設立された授産場である。千勢子の「鉱毒被害地巡回報告」（『婦人新報』70号・明治36年2月25日、所収）には、授産場の状況が報じられている。そこでは、当時輸出品であった「経木」（西洋婦人帽子の原料にて柳の木を削り麦わらのように編んだもの）の編み方を教えつつ、その生産がおこなわれた。この「経木」は1人1反を生産でき、その賃金は編み方により1反15銭から40～50銭であるから、「彼等にして勉むる処あらば一家を支ふるに充分なる賃銭を得べし」と、千勢子はこの授産事業に期待をかけ、鉱毒地の他の地域にもこの授産場を設立することを考えていた。

被害地には眼病と胃病の患者が多く、それらの治療はきわめて緊急な課題であった。千勢子の最初の現地視察の直後すなわち11月27日、海老瀬村の奈良藤介以下4名が上京し、赤坂眼科に2名、<sup>(29)</sup>聖路加病院に1名、慈恵病院に1名が入院している。これは千勢子の懇願によるものであった。その後も鉱毒地から病人が上京し、東京の各病院に入院した。これは、救済婦人会による施療活動のひとつの方法であった。「鉱毒被害地の消息」として『婦人新報』（63号・明治35年7月25日）の報ずるところによれば、「近来は麻疹流行し殊に時候不順の爲め各村病者多く、東京の医師も皆多忙の時なれば芝口に仮施療所を設けて施療中なり、此主任者は和田病院長和田劍之助氏にして相変らず熱心に尽力し居らるるなり」ということであつた。<sup>(30)</sup>なおこの記事によれば、鉱毒地各地に死亡者多く、死亡者には2円ずつが葬式料として救済婦人会から支給された。

注(28) 阿部「足尾鉱毒問題と潮田千勢子」参照。宮田茂編『板倉町史』別巻1（同町教育委員会・1978年3月）398～399・589ページ参照。

(29) 宮田編・前掲書、396ページ以下参照。

(30) この仮施療所は、鉱業停止期成同盟会事務所の半分を使って設けられた（阿部「潮田千勢子」）。

### 足尾鉍毒事件における潮田千勢子

以上のような施療活動のほか、千勢子は鉍毒地に医師・看護婦を伴い、各戸の患者を診察・治療させた。しかしこのような施療活動は、鉍毒被害地救済仏教者同盟会が現地の3か所に施療所を設けた積極性と比較すると、キリスト教側の立ちおくれは否めない。救済婦人会の側には、救援活動をめぐる仏教団体との競争意識があったとは考えられぬが、鉍毒現地には、仏教とキリスト教が競争・対抗しているとの意識が存在した。しかし、先にも触れたように、救済婦人会はキリスト教徒を中心としたボランティアな運動体にすぎず、その組織力・動員力において、仏教同盟会の比ではなかった。また、仏教側の医療救済事業への積極性は、鉍毒問題への発言の「社会性」の稀薄化を物語り、「政府の教団に対する恫喝に屈した点」に基づくとの、吉田久一論文の指摘にも注目した<sup>(31)</sup>い。

## Ⅶ 結 び

1903(明治36)年7月4日、当時婦人矯風会会頭でもあった千勢子は、胃癌のため病没した。千勢子の死は、救済婦人会の運動の終焉でもあった。当時鉍毒問題は治水問題にすりかえられ、鉍毒問題は終わったとする世論操作によって、鉍毒問題への関心は薄れていった。救済婦人会の運動を支えた婦人矯風会においても、その点例外ではなかった。千勢子に代って鉍毒地救済に献身する指導者は、矯風会の中からはあらわれなかった。千勢子の最も良き協力者であった松本英子は、すでに1902年10月、渡米して日本を去っていた。突然の渡米の理由のひとつとして、府馬清著『松本英子の生涯』(昭和図書出版・1981年3月)は、英子の鉍毒問題に関する実践の中での挫折感をあげている(89ページ)。

それでは、千勢子の活動は、鉍毒事件全般の中でいかに位置づけられるであろうか。千勢子が鉍毒地への救援活動において先導的役割を果たしたことはいうまでもない。周知のように、鉍毒反対運動の主流をなしたのは、足尾銅山の鉍業停止の大学請願運動にはかならなかった。補償問題をめぐる折衝等は殆んど省みられなかった。それらが、運動の分断につながる危険を伴ったからである。しかし被害民の生活の荒廃は放置しえぬ状況であった。こうした事情のもとで、被害民の差し迫った必要に答えるべき救援活動の先鞭をつけたのが救済婦人会であり、その指導に当たったのが千勢子であったのである。その影響が婦人層・学生層に及び、仏教団体の活動を促進したことはすでに見たとおりである。

鉍毒被害の救済に傾倒することは、ともすると鉍毒問題のもつ社会性や政治的問題性の認識を稀薄にし、慈恵的・恩情的社会慈善事業にその活動を偏向させる危険を伴う。その点千勢子において

注(31) 吉田久一「足尾鉍毒事件と仏教」(藤島達朗・宮崎円遵編『日本浄土教史の研究』平楽寺書店・1969年5月、所収)参照。ただし救済婦人会の仮施療所は、仏教同盟会の現地施療所が閉鎖された後の措置である。

は、すでに見たように、足尾鉍毒問題の核心となる点を把握し、それについての対応を実行した。

また、千勢子の社会的実践活動の基本がキリスト教信仰にあったとはいえ、千勢子の信仰は、安易な情緒的な憐憫や同情にはしるものではなかった。このことのゆえに、隣人愛の名において古河への同情をうんぬんするといった、一部のキリスト教徒にみられた過誤に、千勢子はおちいらなかった。千勢子が、慈善事業の限界を知りつつも、救済の問題に教育や授産の問題を関連させ、そのための具体的計画を推進しようとしたのも、千勢子の信仰が社会的意識に裏打ちされたものであった証拠といえよう。

ただ、千勢子のアピールに答え、救援のために金品を献じた者のすべてが、千勢子と同様に鉍毒問題の社会性・政治性にめざめていたかどうかは疑問である。すでに述べたように、救済演説会の効果は多分に木下や田村の熱弁に負うていた。それだけに情緒的に盛りあがった救援活動は、堅実な運動として永続しえなかったという批判も成り立つであろう。この点についての責めの一端は、千勢子にもかかってくるといわざるをえない。

救済婦人会の活動が、千勢子ひとりの力でなしえたものでない点はいうまでもない。これを支えた有志のキリスト教徒があり、婦人矯風会々員があり、一般市民があった。さらに身近かにあって助言と協力を惜しまなかった島田三郎・木下尚江・田村直臣・和田劔之助・安部磯雄等の存在も忘れられない。しかし、千勢子の活動がキリスト教会全般の支持に預ったとはいいい難い。というのは、救済活動が始った時期は、日本のプロテスタント教会では、超教派的な布教の大キャンペーンとしての20世紀大挙伝道が展開された時であった。田村直臣は、このキャンペーンにおいても重要な役割を果たした。<sup>(32)</sup>日本の教会全般が、こうした布教のために信徒を動員し、教勢拡張に専念する時期には、キリスト教徒の社会的関心や社会的実践への志向は後退せざるをえなかった。その意味で、千勢子による救援活動へのキリスト教会からの支持は、必ずしもそれほど強力なものではなかったのである。

一方、日本のプロテスタント教会には、以上のような組織的大挙伝道に批判的な一派もあった。それは、信仰における個人の自主性と自由を重視し、信仰の純粹性を強調する正統主義的立場であり、植村正久はその先頭にあった。この立場からは、キリスト教徒の社会実践は第二義的なものにすぎないとされる。植村の説教の中に、「今日の教会が無暗に社会問題に手を出したり、伝道者が漫然慈善事業に奔走したり、甚だしきは田中正造の手先きと為って、得々然たるは何たる間違であるか。」<sup>(33)</sup>ということばが見いだされる。

以上の点から、千勢子の実践活動がキリスト教に触発されているとはいえ、それが日本の教会全

注 (32) 田村直臣と鉍毒事件との関係については、拙稿「鉍毒問題とキリスト教徒—田村直臣の場合—」（前掲・『田中正造と足尾鉍毒事件研究』1号、所収）を参照。

(33) 植村正久説教「神の僕」（『植村全集』2巻・同刊行会・1932年5月、所収）。

### 足尾鉍毒事件における潮田千勢子

般につうずるものではなかったことが知られる。千勢子の活動は、キリスト教徒のある一部の層に支えられたにすぎず、従ってその活動は千勢子の孤独の闘いである面も少なくなかった。特に救済演説会をつうじての盛りあがりやがて下降をたどった頃から、その感はいっそう強い。救済婦人会の活動が、田中正造や被害民の間で、千勢子の個人的誠意の所産として受けとめられているのは、この点にかかわっている。

例えば田中は、千勢子の死の翌日の日記に「我友の死ハ死にあらで其神の いきてそのままありとおもへば」と記している。さらに同日の項に、「潮田氏ハ云ふ、長ハ却て僕なりと。此至言ハ又神を祈る人ニあらざるべからず。」と田中は書いて<sup>(34)</sup>いる。

1904（明治37）年1月15日、栃木県藤岡町の寿福寺で営まれた千勢子の追悼会に、東京での葬儀に参列できなかった鉍毒地の男女数千人が参加したというのも、千勢子への敬慕と感謝のあらわれであった。<sup>(35)</sup>岩崎佐十ら8名の被害地農民が、自分たちの力で千勢子への感謝の記念碑を栃木県足利郡毛野村川崎に建てたことについても、以上と同様のことが指摘できる。この碑は、その後渡良瀬川の河川改修で移動されたが、現在なお足利市川崎町1849番地の岩崎佐十の遺族宅の庭先に立っている。

〔付記〕千勢子の長男・伝五郎は、1902年5月15日、35歳で夭折した。千勢子はこの悲しみを救援活動の中でのりこえようとした。伝五郎と妻光子（福沢諭吉の5女）の長男勢吉は、後に慶応義塾大学工学部教授となり、次男江次は同法学部教授・慶応義塾長となった。

（明治学院大学経済学部教授）

---

注（34）前掲・田中全集10巻、460・463ページ。

（35）阿部「潮田千勢子」参照。